

8月に一人で登ったばかりの鳳凰三山へ二度目の試み。今回は相手が二人、しかも大学時代に山岳部にいた経験豊富な二人。それに今や11月も終わりに近づき、およそアルプスと呼ばれる峰々は根雪を抱きつつある。言うならば「冬山」である。草野・中村両氏はともに冬山経験があるが、私にとってはまだ「冬山」という言葉だけでは現実が思い浮かばない。彼ら先輩二人がいるからこそ、この山行が成り立った。

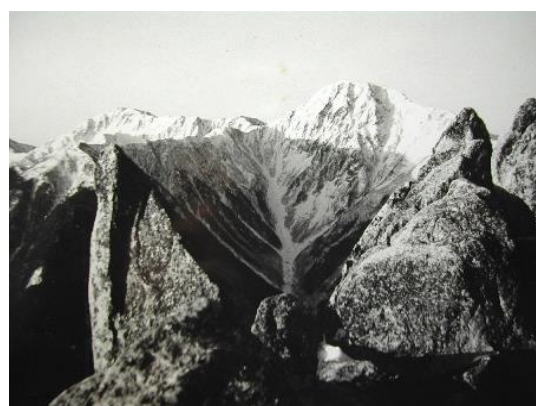
昭和39年11月21日

12時45分新宿発。昼下りの中央線は空いていて、まさか連休とは思えない様相。葦崎着は16時22分。晩秋の早い夕暮れ時、穴山橋からマイクロバスに乗る頃はもう真っ暗になってしまった。100日前の夏の朝と違って小武川の川岸は寒々しく星の瞬きもどことなく厳しそうだ。谷間に入るにつれて兩岸の山肌に白い物が見え出し、月明を浴びて走るマイクロバスは御座石の湯に19時20分に到着。マイクロバスの乗客は我々三人だけだったので、一人330円ということになった。一泊二食付きで宿泊(950円)。

宿の食事に何が出たか忘れたが、あまり満腹しなかったように憶えている。しかし、いつになっても忘れられないのは風呂場の出来事だ。一足先に脱衣した二人が浴槽に入ったところ、他にも数人の客がいたため私だけ取り残されてしまった。ふと見ると隣に誰も入っていない浴槽があったので飛び込んだら、なんとこれが湯ではなかった。あわてて飛び出したところで、ちょうど一人分の隙間ができようやく「湯」にありつくことができた。かくして、今回の山旅は第一日目にして不運に直面することになった。

昭和39年11月22日

6時起床。夜、雨が降ったようで、上の方は雪だと思われる。7時15分に出発。夜行列車で来た人たちがもう到着し始めていた。また燕頭山へ厳しい登り。2104.5mの燕頭山の頂上の熊笹は雪の下に隠されて、まったく別の山のようになっている。周囲の山のどんがりも膨らみも、100日前に見た物とはまったく違ってしまった。



12時ジャストに鳳凰小屋に到着。キスリングを小屋の前に置き、地藏岳へ。小屋から上は歩く道も雪一面となり、賽の河原が近づくにつれて「俺は今冬山にいるんだ」という実感が盛り上がってくる。季節風に横面を張られ歯向かうと真っ向から鼻腔を押さえ込まれて息をすることもできない。左右の耳は毛糸の帽子の下でまだ感覚を失ったまま戻らない。鼻もあごも硬く、手で触れても何も感じない。寒さに身を



踏み跡 < My mountains >

すくめれば足をすくわれる。無我夢中で耐えて地蔵岳を往復し、小屋に戻りほっと一息。

何となく胸中を走り抜ける声にならぬ言葉ある。「うむ、これが冬山というやつか」

それにしても、野呂川の谷を隔てて大きく翼を広げたような北岳、そして甲斐駒、仙丈・・・、素晴らしい眺めにも驚いた日だった。(前ページ画像:北岳)

これらの3000m級の白く剣のような山は、鳳凰三山よりももっとも「冬山」なのに違いない。

夕食はカレーライス。連休の鳳凰小屋は満員。17時半にはもう寝袋の中。

昭和39年11月23日

4時起床、朝食は雑煮。5時35分に出発。昨日空身で登った道を賽の河原へ。(10分休憩)

キスリングが重い上に手がジーンと痛いように冷たい。体は歩くにつれて温まってくるが、手と耳、口の周りなかなか温まらない。(右写真:朝一番の賽の河原への登り)

観音岳7時45分、ここからの白根三山は夏見た時より遥かに高く大きく、恐ろしく聳え立って見える。季節風は相変わらず休みなく右半身をいやというほどに打ちのめしてく



る。風のない樹林帯に入ると南御室小屋(9時25分)。今度は凍結した道に、数え切れぬほどに尻餅をついて一苦勞。杖立峠通過は10時50分。夜叉神峠に11時55分に到着。一呼吸の休みだけですぐに下山開始。

夜叉神峠口に12時22分に到着。タイミングよく12時25分のマイクロバスで芦安に下山。

甲府から14時58分発の始発電車で、ゆったり座って帰ることができた。

かくして我が初めての冬山は、無事といえども苦しかった数々の思い出を残して終了した。

そしてこの山行をきっかけに、雪と氷の冬山にも入ることが始まった。

以上

(修正・更新:2023年10月)